

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）禍をふまえた 地域学習の在り方を考える

－ オンラインシンポジウムの開催経験から －

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

吉田寛

(奈良教育大学附属中学校)

中谷佳子

(千葉大学教育学部附属小学校)

河原和之

(立命館大学非常勤講師)

Considering the Modality of Local Learning based on the Experience of COVID-19 Pandemics :
From the Experience of Organizing an Online Symposium

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Hiroshi YOSHIDA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Keiko NAKAYA

(Chiba University Elementary School)

Kazuyuki KAWAHARA

(Part-time lecturer, Ritsumeikan University)

要旨：本稿では、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的・全国的拡大による学校教育への影響をふまえた、地域学習（郷土学習）の在り方を検討する。2020年7月19日に、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とESD 地域学習—『With コロナ』の経験を共有し『Post コロナ』に活かそう—」をテーマに、Zoomを用いたオンラインシンポジウムを企画実施した。本稿ではまず、このシンポジウムの開催経緯と内容、実践報告を示す。そのうえで、シンポジウム内でおこなわれた議論および開催後の参加者アンケートをもとに、COVID-19の流行の経験をふまえた今後の地域学習の在り方を検討する。結果は3つに大別できる。第一に、地域をめぐるフィールドワークは、地域のリアルな状況を把握するうえで重要であり、関係者の理解を得たうえで積極的に実施する必要がある。第二に、オンライン環境の活用可能性が増していることは地域学習にとって好機になる。第三に、学びの対象としてのコロナ禍が加わった。ローカルな地域の様々な要素とグローバルな要素がリンクしていること、社会構造や政治が私たちの行く末を大きく左右することが実感できる。以上を組み合わせることで、地域学習を通じて、学習者は持続可能な社会の構築を自分事に行う可能性がある。

キーワード：地域学習 local study

ESD（持続可能な開発のための教育） education for sustainable development

地理教育 geographical education

コロナ禍 coronavirus crisis

フィールドワーク fieldwork

1. はじめに

本稿の目的は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的・全国的拡大による学校教育への影響をふ

まえた、地域学習（郷土学習）の在り方を検討することである。このテーマで実施したオンラインシンポジウムの開催経緯や内容を記録するとともに、議論を経て得られた知見を今後に生かしたい。

構成と研究方法は以下のとおりである。まず、本章に

において、オンラインシンポジウム開催の経緯と内容を示すとともに、事前の参加申込フォームの情報を用いて参加申込者（144名）の概要を把握する。第2・3・4章には、オンラインシンポジウムにおける3名の実践報告を記す。それぞれ、コロナ禍（COVID-19の流行による災難や危機的状況）における地域フィールドワークの可能性、コロナ禍における小学校3年次の地域学習の実践、コロナ禍における地域経済の教材化やコロナ禍を切り口にした課題の探求をテーマとした。第5章では、シンポジウムにおける議論の概要を示す。第6章では、シンポジウムにおけるグループディスカッションの記録と、開催後に参加者に記入を依頼したアンケート（回答者83名）をもとに、COVID-19の流行の経験をふまえた今後の地域学習の在り方を検討する。

さて、2020年は、前年から世界的に拡大しているCOVID-19に、日本も大きな影響を受けた。学校教育においては、首相が2月27日に突然表明した全国一律の臨時休校の要請により、小・中学校や高等学校などに関係する人々の間に衝撃が走った。多くの学校は約3か月で再開されたが、各学校・各自治体は休校期間中やその後の対応にさまざまな工夫と配慮を余儀なくされた。特に、オンライン学習をはじめとする遠隔教育への転換は、学校教育界のパラダイムシフトとなり、試行錯誤しながらもデジタルツールにいっそう積極的に関わっていく方向になっている（前田、2020；森本ほか、2020）。

こうした中、学校教育における地域学習は、フィールドワークの実施、地域住民のゲスト講師としての招へい、遠足や修学旅行をはじめとする特別活動との連動など、従来行われてきた多くの活動が困難化した。そこで筆者らは、2020年7月19日に、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とESD地域学習—『With コロナ』の経験を共有し『Post コロナ』に活かそう—」をテーマに、Zoomを用いたオンラインシンポジウムを企画実施した。奈良教育大学に当時事務局のあった日本ESD学会と、奈良市周辺の小学校教員と奈良教育大学の教員・学生・卒業生を中心とする同学会第4回近畿地方研究会実行委員会、それに河本が部会長を務める人文地理学会地理教育研究部会が主催し、奈良地理学会および奈良教育大学が共催する形をとった。

本企画は、もともと2020年7月25日に奈良教育大学において開催予定であったイベントの、内容や開催方法等を変更したものである。日本ESD学会第4回近畿地方研究会実行委員会を中心に、「地域学習を位置付けたカリキュラムマネジメント—双方向的な地域連携を目指して—」をテーマに、シンポジウム、ワークショップ（6会場）、研究発表（分科会）、ふりかえり、懇親会を企画していた。しかし、COVID-19の世界的拡大を受け、開催方法や内容を再検討せざるを得なくなった。再検討した5月には、学会等の多くがイベントを中止・延期していたが、そればかりでは社会的役割を果たせない。

今やれること、やるべきことを、形や規模を変えてでもやりたいと考え、日本ESD学会でも人文地理学会でも初となる、オンライン開催に挑戦した。従来の開催方式でも会場に足を運ばない人はいらる。ネット環境があれば在宅でも参加できるメリットを優先し、参加者の層を広げる方向で可能性を拓きたいと考えた。テーマについては、コロナ禍をふまえたほうが多くの人に関心をもってもらえると考えて変更した。また、内容はシンポジウムのみに絞った。

企画の再検討段階であった5月16日には、地域学習に密接にかかわる地理教育に関して、日本地理教育学会と公益社団法人日本地理学会の地理教育専門委員会による、COVID-19をふまえたオンライン交流会が実施された（井田、2020；田部、2020）。例年と異なる学校・学級経営や授業展開などを余儀なくされる中、文部科学省による各種通知を整理して地理教育の関係を説いた三橋（2020）には注目が集まった。また、オンラインでの授業づくりや学級づくりの実践報告（河合、2020；今野、2020；中谷、2020）、従前からおこなわれてきた地理教材共有化サイトの構築の紹介（柴田、2000）により、地理教育関係者、特に小学校・中学校・高等学校等の現職教員の支援が試みられた。さらに、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いた情報交換・交流の場や、全体での意見交換報告も行われた（麻生ほか、2000）。オンラインシンポジウムの企画運営に活かすべく、筆者らもこれに参加した。中谷が本シンポジウムにおいて実践報告をしたのは、この縁である。また、このオンライン交流会では高等学校や大学の教員の参加が比較的多かった（三橋・志村、2020）が、筆者らのシンポジウムはもともと小・中学校を中心に考えていたため異なる層を取り込み、開催時期の違いも活かした実施が可能と考えた。

事前告知に用いた開催趣旨は、次のとおりである。“コロナ禍によって学会・研修・研究会等の多くが中止・延期になり、教育実践の省察や対話・議論の機会が不足している状況にある。そこで本シンポジウムでは、ここまでの「With コロナ」の状況下における地域学習の実践経験を共有したい。また、これらの貴重な経験を「Post コロナ」のESDに活かす方途を探りたい。”当時、学校教育界は突然襲ってきたコロナ禍とそれへの国や自治体の対応に翻弄され、先が見通せない状況にあった。その中で地域学習の実践経験を共有し、ESD（持続可能な開発のための教育）としての地域学習の在り方を議論する場にしたいと考えた。

内容は下記のとおりである。

- ・開会の挨拶（日本ESD学会・長友恒人会長）
- ・趣旨説明（河本大地）
- ・実践報告

①「コロナ禍における地域フィールドワークの可能性を探る」吉田 寛（奈良教育大学附属中学校）

②「コロナ禍における小学校3年次の地域学習の実践」

中谷佳子（千葉大学教育学部附属小学校）

③「コロナ禍における地域経済の教材化、コロナ禍を切り口とした課題の探究～SDGs、ESDとの関連性を問う～」河原和之（立命館大学非常勤講師等）

- ・グループディスカッション×2
- ・質疑応答
- ・指定討論者からのコメント 佐藤浩樹（神戸女子大学）、碓井照子（奈良大学名誉教授）、中澤静男（奈良教育大学）
- ・閉会の挨拶（奈良地理学会・内田忠賢会長）

指定討論者は、専門性と開催団体間のバランスを考慮して依頼した。佐藤氏は、社会科教育、特に地理教育を専門としており、群馬県での小学校教員経験が長く、現在は大学において教員養成の中核を担っている。佐藤（2019）などの著書がある。碓井氏は、GIS（地理情報システム）を専門としており、地理教育への造詣も深い。高等学校の地理歴史科における新たな必修科目である「地理総合」の創設には特に大きく関与した（碓井、

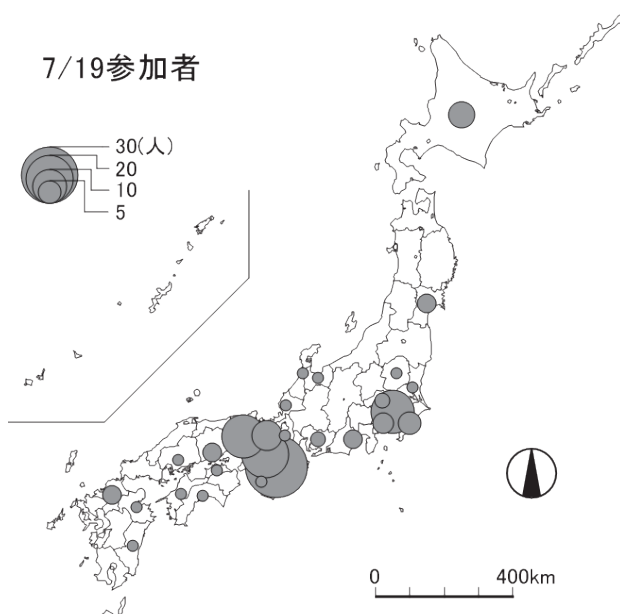


図1 都道府県別にみた参加者の分布
MANDARAを用いて作成。

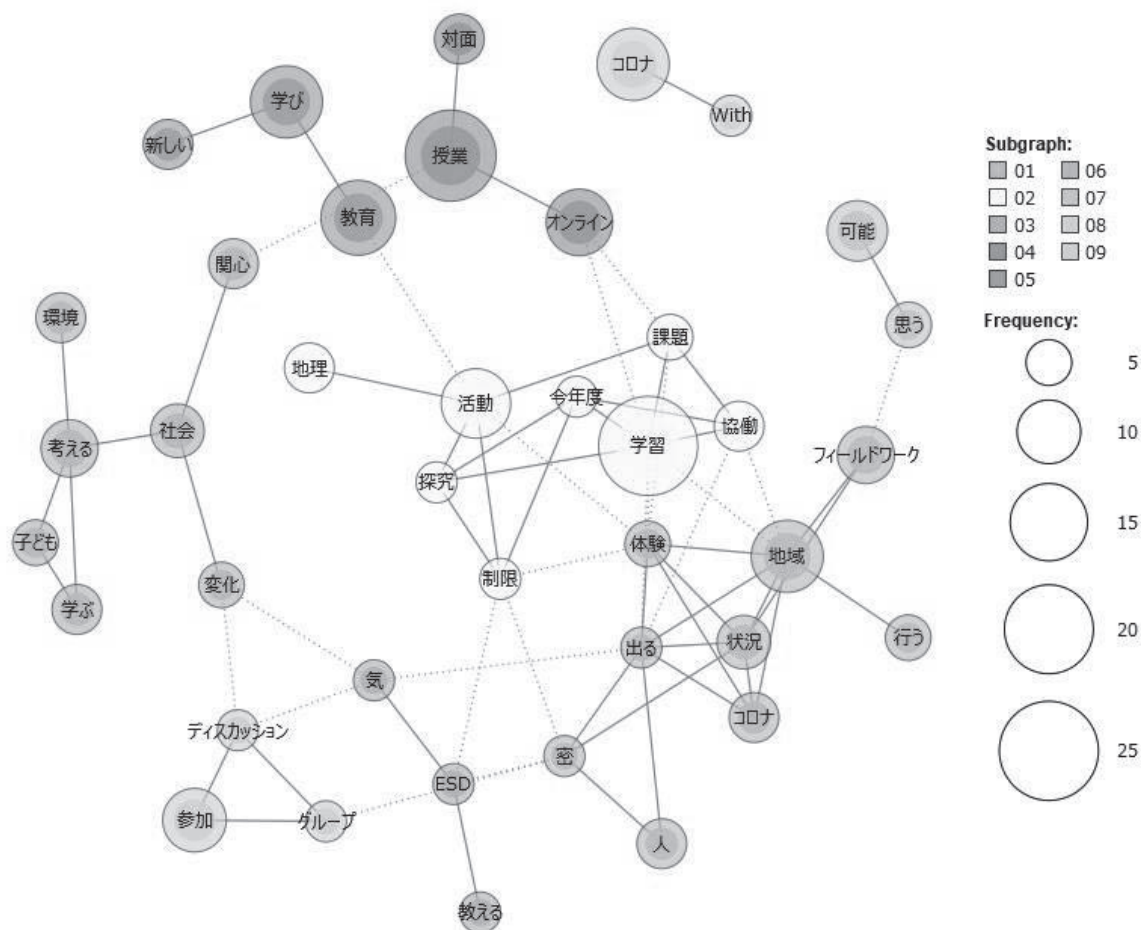


図2 参加申込フォームに設けた「『With コロナ』の学びに関してあなたが感じる課題や関心のある事柄について教えてください」との問いに対する自由回答の共起ネットワーク図
KH-Coderを用いて作成。

2018)。中澤氏は、ESD を専門としており、現職教員との協働や教員養成・研修の経験が豊富である。

シンポジウムへの事前の参加申込は 144 名であった。当初は実行委員会での議論により、「Zoom 荒らし」防止策として開催団体の構成員のみ参加可としていた。しかし、広く参加を募りたいという声が登壇者等から出たため、申込締切直前になって招待枠も設けた。結果として、図 1 にみられるように遠方からの参加者も多数得ることができた。これはオンライン開催ならではのと言える。内訳は、大学・短大・高専等の教職員が 34.0%、奈良教育大学をはじめとする各地の学生・生徒が 29.9%、小学校の教職員が 11.1%、ほかに中学校・高等学校の教職員、NGO 関係者などとなった。小学校教員の参加を多数得られたのは、日本 ESD 学会に会員が多いことや、実践報告者の呼びかけなどによる。

参加申込フォームには、「『With コロナ』の学びに関してあなたが感じる課題や関心のある事柄について教えてください」との自由回答項目を設けた。80 名の記入があり、ディスカッションのための場づくりの参考にした。図 2 に回答内容の概要を示すので参照されたい。当日の参加は 116 名であった。

なお、下記に示す実践報告は、シンポジウム実施前に実践報告者 3 名が指定討論者 3 名に送ったものを基にして、事後に一部を加筆修正したものである。執筆の仕方が三者三様であり、情報の一部が古いものもあるが、当時の状況をリアルに伝えるべくあえて加筆修正は最小限にした。

2. 実践報告 コロナ禍における地域フィールドワークの可能性を探る

本章は、奈良教育大学附属中学校における実践にもとづいて記す。内容は執筆時点のものである。当時の状況の記録として、そのまま掲載する。

2.1. 新型コロナ感染拡大の影響

約 3 か月間に及ぶコロナ休校期間・外出自粛を経て、学校再開後においても検温、消毒、そしてソーシャルディスタンスに気を配りながらの「新しい生活様式」の中、「With コロナ」のできることの模索が続いている。

本章のテーマである「地域フィールドワーク」などの行事については、延期または中止を検討している学校が多く、まずは授業遅れ回復のために時間が割かれているというのが実情だと思われる。実際、筆者が勤務する中学校においてもこれまで約 30 年弱にわたって毎年中学 2 年生が、「寝屋子制度」や「神祭」などが残る三重県鳥羽市の離島・答志島を訪ねて漁家へのインタビュー活動を行ってきたが、今年度については「島に医療施設が 3 つしかないこと」「島には高齢者が多く住んでいる」という点を考慮して答志島へ渡ることを断念し、鳥羽の海岸での磯観察など、規模を縮小して実施することに計

画変更を余儀なくされた。

2.2. こんな今だからこそその価値ある学びを求めて

本校の地域フィールドワークは、上記のような宿泊行事以外にも、地元奈良の地域学習として「奈良めぐり」という校外学習を春と秋の年間 2 回実施している。「春の奈良めぐり」は社会科が中心となって文化財学習に重きを置いた形で奈良の世界遺産や史跡を訪れているが、「秋の奈良めぐり」は「総合的な学習の時間」の位置づけとし、学年の担当教員全員が関わる形で複数のコースを編成して地域学習に取り組んでいる（2019 年度からは個別学年単位ではなく、1・2 年の学年合同で奈良めぐりを実施するよう変更している）。

今回は後者に焦点を当てて話を進める。その理由は、この地域フィールドワークが従来の社会見学のような「ハコモノ見学」ではなく、共通するテーマとして「ESD 的価値観を意識しながら、SDGs につながるような学び」を組織的に教員間で共通理解し合いながら推進し、今なお、各コースがバージョンアップを模索し続けているからである。

2019 年度までの 3 年間で実施されたコースは、以下の一覧の通りである。

「古地図散策」「観光とホスピタリティ」「奈良公園ランドスケープ」「ミツバチ（養蜂家）から生き方を考える」「共生 奈良シカ」「春日山原始林」「大和野菜」「墨」「うちわづくり」「多聞城」「戦争遺跡」「先輩の働く姿」

学習過程において、指導教員は 2 つのことを心掛けている。

(1) 「人に出会う学び」から生まれる効用（教員自らの価値観の変容が、生徒の変容を引き出す）

1 つ目は、「子どもたちと地域で活動されている方々をつなぐこと（人に出会う学び）」を大切にしているという点が挙げられる。「専門性」という点において、当然、地域で活動されている方々は詳しいわけであるが、それだけでなく、教員とは違った視点でものごとを捉えられているということに気づかされる。例えば、教員は職業柄「A さんという専門家と生徒を出会わせることによって、SDGs の〇番について学ばせたい」という思いが働くが、A さんから言わせれば「SDGs の知識だけを持っていても何も変化は起きず、世の中は変わらない。」のである。A さんは危機感を持っているからこそ活動（行動）しているのであって、その生きざまに生徒が触れてこそ初めて「自分ごと」に置き換え始めることができ、自分ができていないことも含めて葛藤（もやもや感）が生まれ、その後、さまざまな思考をめぐらし多角的に解決策を考え始め、ようやく SDGs につながっていくことに至るのである。奈良教育大学の中澤静男准教授は「〇〇すれば持続可能になるというものではなく、さらに、誰かに言われてするものでもない。自分が「気

づいて動く」ことができるようになる ESD が求められている。」と仰っており、ESD は人々の社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育であるということからも、まずは教員自らの価値観の変容が生まれることによって、生徒に対するアプローチの仕方にも変化を促すことが期待される。

(2)「教える教師」から「生徒と共に学ぶ教師（協働）」へ

2つ目は、教員の役割として「ファシリテーター的な立ち位置」で、生徒の「問い」を深掘り（深化）させていくことが求められる。例を挙げれば、「奈良公園」について学ぶ場合、教師はまず「奈良らしい景観とは？」というお題の発問のみを生徒に問いかけ、さまざまな視点から見ていくことを伝えさえすれば、それを掘り下げていくことは生徒に委ねることが可能である。そもそも奈良公園は、自然がつくりあげたものと、過去の人々が価値や意味を感じて残してきたものが空間の履歴として折り重なって形成されており、立場や視点が変われば見え方も変わってくるのである。「人の手をどこまで入れるか」といったテーマは、景観論争など、どの地域の学習でも応用可能である。

これまで教師が全て請けおってきた事前の現地下見からコースづくり、ワークシートづくりなどを、子どもたちと教員が共に行なう「協働的な学び」とすることで、生徒が主体的に行事づくりに参加することができ、生徒の素朴な疑問や関心を膨らませながら「見えないものが見えてくる」「見ようとしてこそ見えてくる」学びを深めていくこともできる。

2.3. コロナ禍における地域フィールドワークの可能性を探る

では、実際に今年度（2020 年度）の「奈良めぐり」はどのように計画していけばよいか、という点においては、様々な壁にぶつかっている。

例えば、外国人観光客が訪れない日々が続くなかで、奈良の観光業は大丈夫なのだろうか。奈良でゲストハウスを営まれている方の中には、テレワークの職場としての活用や、医療関係者向けの宿泊施設として提供されたりするなど、次なる一手を模索されている方々がおられる。一方で、外国人の観光客が戻ってこられる日を心待ちにして今はひたすら耐え忍んでおられる方もいる。経営面的に事業継続が厳しい状態になっているゲストハウスもあるなかで、生徒に興味本位で質問させるようなことだけは避けなければならない。そのためには、社会構造としてどこが問題になっていて、どのような対策を打てるか（例えば行政的な支援策など）という点からも迫り、市役所などへの取材学習をさせたうえで、「寄り添ったかたち」での解決策を提案できるようなつながりをつくっていききたい。

筆者自身としては今年度、新コースとして「多文化共

生コース」を計画している。奈良で暮らす外国人は今後ますます増えることが予想されるが、言葉の問題、文化の問題など壁に感じておられることは多いと思われる。コロナによる緊急事態宣言期間中は地域の公民館が使用できず、日本語教室もなかなか開くことが出来ない状態だったという話も耳にした。また、外国人だけに限らず、県外から奈良県へ移住してきた方々についても取材することによって、地元に住んでいるからこそ気づくことができない、外（そと）の者から見た奈良の魅力や課題を明らかにしていくことなど、現在授業構想を練っている最中である。

2.4. ESD 地域学習の意義を考える「自分ごと化」「寄り添う」

ESD は「価値観と行動の変容を促す教育」である。しかし、現実にはなかなか「自分ごと化」することは困難を伴う。10 月中旬実施予定の奈良めぐりに向けて、来週からは事前学習が始まる。このコースを選んだ、ある生徒の希望調査用紙には次の文章が書かれていた。

「SDGs で大事にされていることの 1 つに「誰も取り残されない」というのがあります。世界規模の目標を「奈良」だけで考えたときに、できているのでしょうか。世界を目指すなら、まずは「奈良」から見直して改善していくことが必要だと思います。なので、実際に人の声をきいて、もっと深く学びたいです。」

この生徒が書いているように、SDGs は日本以外の世界のことだけではない。自分の身近な暮らしの延長上に世界のことを見ることができるようになってこそ、「自分ごと化」が図れる手がかかりがあるのではないだろうか。そのためには、まずは遠い存在だと感じていることが、実は近い存在であることや、今まで気づいていなかったことに気づくことから始めていきたい。そこからようやく「寄り添う」ことができるのではないだろうか。

コロナ禍のなかで、「あきらめ」の気持ち、知らず知らずのうちのストレスの積み重ねが子ども、教師、そして社会全般に拡大している。こんな今だからこそ、たくましく生きていきたいし、今は見えない将来を生徒たちと共に探して感性を磨いていきたい。これから始まる子どもたちとの学びが益々楽しみになってきた。

3. 実践報告 コロナ禍における小学校 3 年次の地域学習の実践

本章は、千葉大学教育学部附属小学校における実践にもとづいて記す。前章同様、内容は執筆時点のものである。当時の状況の記録として、そのまま掲載する。

3.1. はじめに

2020 年 3 月。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全校一斉休校が決まった。未曾有の事態が続く中で、教

育界では、「学びを止めるな!」とさまざまな取組が行われてきた。

本校では、一斉休校が決まった3月の段階から、Microsoft 社が提供する Teams というグループウェアを活用し、オンライン学習を試験的に始めた。休校前日に、子どもたちへアカウントを配付し、使い方は、ICT主任が全校ビデオ放送で伝えた。自由参加ではあったものの、約半数の子どもがログインし、教員から出される課題に取り組んだ。教員アンケートによれば、この時期のオンラインの活用について、全員が肯定的な回答をしていたようである。休校期間中も子どもとつながることのできる安心感は、子どもだけでなく教員にもあったのだろう。

筆者は2020年4月に本校に赴任した。本校では4月当初から、本格的なオンライン学習の導入へと踏み切ることとなった。学級発表も学級開きも、Teams を使い、オンライン上で行われ、学校でありながら、「教室」ではない、オンラインという新たな空間で始まった「学級」作りに、職員は皆、悩み、試行錯誤を繰り返した。

本報告では、第3学年「千葉市のようす」の学習をもとに、オンラインという新たな空間だからこそ見えた「学校の学び」の成果と課題について考えていきたい。

3.2. Teams でのオンライン授業作り

本校では、主にオンラインで行う朝の会と子どもたちが取組む課題の送受信を Microsoft Teams を使用して行ってきた。課題は、Word によるワークシートと PowerPoint を利用した動画を作成し、配信した。子どもたちは取組んだ課題を、返信し、それに対して教員がコメントを入れていながら学習を進めた。そのような運用を続ける中で、オンラインの学習であっても、教員と子どもの「双方向のつながり」は、すぐに実現できることがわかった。しかし、教員と子どもの双方向のつながりを超えて、子ども同士の関わり合いの中で学ぶ、「水

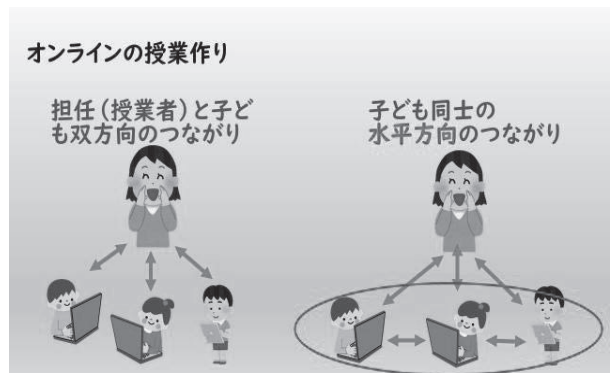


図3 オンラインの授業作り



- 問題例 カレーが有名な国はどこかな? (インド) 住所は? (オ) 丁目 (3) 番地
- 問題① サンタクロースが有名な国はどこかな? () 住所は? () 丁目 () 番地
- 問題② マダガスカルに住んでいる動物は何かな? () 住所は? () 丁目 () 番地
- 問題③ コアラが住んでいる国はどこかな? () 住所は? () 丁目 () 番地
- スペシャル問題・あなたの行ってみたい国はどこですか? () りゅうは?

名前

図4 オンラインの課題ワークシート

帝国書院編集部編(2020)『楽しく学ぶ小学校の地図帳』帝国書院, pp.1-3 に加筆

平方向のつながり」を生み出すことはできないか、と考えるようになった（図3）。例えば、世界地図の問題作りをする課題では、「チャドはどこだ？」という、子どもからの問題に対して、多くの子どもがチャドのことを調べて返信するといった主体的な学びが見られた。また、問題を出した子どもは、友だちの調べを賞賛し、答えた子どもが感謝するといった対話も生まれた（図4）。

そこで、第3学年「千葉市の様子」の学習では、テレビ会議でのオンライン授業やグループ会議を利用しながら、子ども同士の「水平方向のつながり」を重視した単元を計画した。本校は、広域学区であり、学級には千葉市の6つの行政区のうち、5つの区から通学してくる子どもがいる。通学グループという、利用駅や方面に分かれたグループ活動はあるが、千葉市の中でも、「同じ行政区に住んでいる友だち」ということを意識したことは少ないのではないかと考えた。そこで子どもたちの新たなつながりを行政区に求めて、オンライングループ会議を行った。

（指導の過程）

- ①（授業者の住む）船橋市のじまんの場所について動画を見る。
- ②千葉市じまんの場所をインタビューして調べる。
- ③自慢の場所が何区か確認する（オンライン一斉授業）。
- ④「た（建物・施設）・こ（交通）・と（土地の使われ方）・む（昔からあるもの）・し（しぜん）」の視点で千葉市と行政区のようすを調べる。
- ⑤これまで調べてきたことをまとめる新聞を作る（オンライングループ会議）。

特に、②と⑤については、国語の「メモを取りながら話を聞こう」や「調べて書こう、私のレポート」の課題とコラボレーションして提示した。また、まとめの新聞の学習に入る前には、学年の児童を対象に「オンライン新聞講座」を行った。その後、子どもたちから、「何を書こうか、迷う。」といった声が上がった。そこで、「行政区ごとにグループ会議を開いて、アドバイスし合おう。」と話し、実施することとした。会議後、子どもたちは、「美浜区のいいところがたくさん分かった。」「稲毛駅には、すごい歴史があった。」といった新たな気づきに加えて、「はじめて友だちの顔をきちんと見ることができた。」「いっぱい話せて楽しかった。」と、友だちとつながることの喜びも感じたようであった。

3.3. 本実践から見てきたオンラインでの学びの成果と課題

子どもたちが関わり合う、水平方向のつながりの実現を目指して授業を行う中で、成果や課題が見えてきた。成果としては、3年生であっても、オンラインによるグループの話し合いが可能である、ということである。自

分たちで司会者を立てたり、順番を決めたりしながら、スムーズに話し合うことができた。また、クラス替えをしてはじめて話をする子どもも多い中、少人数で話ができる機会に、「楽しかった」という子どもが多かった。

しかし、課題もある。オンラインの一斉授業では、子どもの表情やつぶやきを拾いながら授業を行うことは非常に難しい。授業準備の段階で、子どもが教材や活動のどこに関心を示すかを授業者がよく精査する必要がある。また、本実践では、「アドバイスをしあう」という活動のために、グループの話し合いを行ったが、その話し合いの必要感を十分に子どもたちに持たせることができていたかについては課題が残る。オンラインであっても、子どもたちが話し合う必然性のある問いを作り、自分ならではの考えをもって、それを交流させていけるような授業を組み立てる必要がある、と考える。

本校では、2020年（令和2年）7月13日から7月30日まで、オンライン通学期間（在宅で学習する）と位置づけ、休校中と同じようにオンラインを活用した新たな学びの形にチャレンジしている。教員は、実践からわかったことや悩み、その解決策などについて、教員もオンライン上にチームを作り、交流してきた。子どももそして教員も学びをとめない。オンラインという新たな空間の可能性を、これからも模索していきたい。

4. 実践報告 コロナ禍における地域経済の教材化、コロナ禍を切り口にした課題の探求—SDGs、ESDとの関連で「ウィズ・コロナ」時代を考察する—

本章は、コロナ禍の大学における「社会科教育法」における「時事問題」の料理法として位置付けた事例である。

4.1. 小中学生に使えるポジティブコロナネタの紹介

「地球にやさしく自分も嬉しい」というSDGsの原点をコロナ禍で実感できるよう、ポジティブ思考のネタを使った授業事例を紹介した。その一つが花屋さんが考えた「母の月」である。5月10日は「母の日」だが、今年はカーネーションの購入による「三密」を避けるため「母の月」とした。このことで、バラなど他の花が売れるだけでなく、カーネーションが「売れ残る」という「カーネーションロス」も解消された。ポジティブ思考によるコロナ禍の工夫がSDGsの課題と結びつく興味ある取組である。（以下の数事例は略）

4.2. コロナ禍、地域経済と生活の変貌～マクロとミクロの観点から～

コロナ禍の経済を「マクロ」と「ミクロ」の視点から考察する授業をおこなった。大阪ミナミを歩くと（図5）、シャッターの下りた店も数店あり、ドラッグストアは閑散としていた。大阪ミナミのある大阪市中央区では3～

5月に約30店が閉店したという。インバウンドによる“バブル消費”の崩壊である。二つの写真を導入に、新聞記事から、コロナ禍の「経済状況」を考察させた。



図5 コロナ禍の大阪ミナミの様子（2020年7月4日）

新聞記事は以下の内容である。「タクシー広がる休業」「子育て世帯への打撃」「現金なくカード払い」「出産諦めようか」「何見ても泣く子」などの記事である。ネガティブな記事が多いが、「ヤマト運輸宅配便13%増」「失業者や困窮者への支援から福祉国家」というポジティブな内容もある。新聞記事を熟読後「コロナ不況の解決！供給かそれとも需要か？」の議論をおこなった。

4.3. コロナ禍、バーチャル株式売買ゲーム

2020年1月24日付新聞の株式欄から10万円以内で3社の株式を購入する。約3か月後の4月30日の株価とを比較し、その「損得」を競うゲームである。1～4月の間は、下落している株式が圧倒的で、上昇しているのは、「味の素」「中外薬」「エムスリー」「楽天」など、わずか11社であった。「なぜこの11社はコロナ禍で株価が上昇したのか？」の討議課題から、コロナ禍の経済状況を考察した。

4.4. 空き家と学生アルバイト

2020年6月に、大阪府枚方市がIT企業と連携して、「コロナ禍」でアルバイトがなくなり学費や家賃が支払えない学生を雇用し、「空き家調査」をおこなった。「空き家問題」は、少子高齢社会の課題であり、現在は7軒に1軒が、2033年には3軒に1軒が空き家になるという。授業では、「空き家が増えるどのような問題がおこるか」を軸に討議を行い、枚方市の学生支援と「空き家調査」を関連付けた意義をSDGsの観点から考察した。

4.5. だれ一人取り残さない～SDGsの原点にかえって～

アフリカ、中南米、外国人労働者等の課題はあまり話題に上らないが、むしろコロナ禍で、その矛盾が明らかになった。例えば、①エクアドルでは「死者が急増して埋葬ができず遺体が路上に放置貧富の差が大きく、貧困層は生活のために仕事にでざるをえない」、②UAE（アラブ首長国連邦）からの労働者が「母国の家族の元に帰りたいが、一度帰れば仕事を失うかもしれない」、③ブラジルのファベラにおいて「公営水道を利用できない

人は約4,000万人に達し、人口のおよそ半数にあたる1億人は下水道なしで生活している」等である。グループで担当を決め、それぞれの事例について感想・意見を交流した後、「なぜこのような状態になったのか（背景）」「どうすればいいか（対策）」を討議し発表させた。

4.6. おわりに

本実践例以外にも、①自衛警察とコロナ差別、②壘田永年私財法が大仏建立の詔と同じ年に発令された理由、③マンダラチャートで考える「コロナ禍」負の連鎖、④「効率」と「公正」から学生支援緊急対策を検証する等、15事例を実践したが字数の関係で省略する。世界や日本そして地域の「コロナ」危機の状況から、今後、克服すべき課題を探求しつつ、SDGsと「コロナ」危機との関連性をポジティブに考察したい。「コロナ禍」の授業を通して、「ウォーム」な「感性」と「クール」な「思考・判断力」「意思決定力」を育て、「ウィズ・コロナ」時代を生きる力を育てたい。

5. シンポジウムにおける議論

5.1. グループディスカッション

Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、2回のグループディスカッションを実施した。1回目は、参加者に実践報告3本の内容と校種の組み合わせを基本とする8テーマから事前に選んでもらい、スタッフ側で振り分けて、3～10人が10部屋に分かれて25分間行った。2回目は、4～5人ずつランダムに12部屋に分かれて20分間の自由討議を行った。

いずれの部屋にも記録係を置き、ディスカッションの内容を記録しているが、発言者を特定できる情報が多いことと紙幅の都合により、ここでの掲載は控える。ただし、議論された内容の一部は第6章で扱う。

5.2. 質疑応答

実践報告者3名への質問は、報告中から随時チャットで受け付けた。質問への回答は口頭で行った。

吉田には、なぜSDGsを核とした取り組みをしようと考えたか、フィールドワークをどう進める予定か、地域学習で何を学ぶかという学習活動の目標をどう設定し生徒と共有したか、教師の価値観変容が生徒の価値観変容につながるという話があったが反対に生徒の価値観変容によって教師の価値観変容が起こった例があれば教えてほしい、身近な暮らしの延長上に世界があるということ意識させるにはどうすればよいのか具体例を教えてくださいなど、11名から質問や感想が書き込まれた。

中谷には、オンラインで話し合い活動する際に子どもたちに設けたルールみたいなものはあるか、子ども同士のつながりをつくるための話し合う環境の設定に対する教師の支援のポイントがあれば教えてほしい、各自での

街に出たの調べ学習において教員側で配慮したこと、他者とののかかわりの中で考えるという点におけるオンラインの限界は何かなどの質問があった。また、「問いの精選」の重要性という点に共感したなどの感想や、応援のメッセージ、地域学習の実践例の紹介も寄せられた。12名からの書き込みがあった。

河原への書き込みは5名で、経済を軸に社会の在り方や人々の心の在り方を具体的にみることができた、コロナによって生じた「陰と陽の逆転現象」に目を向ける教材化の視点が面白かった、現実を見つめながら前向きに思考していくことが大切と思ったなどの感想が寄せられた。また、ESDの教材開発における思考パターンとしてSDGsを念頭にネタを探すのかネタをSDGsと結び付けて価値づけるのか、日本の少子高齢化や中国とアメリカの覇権争いなどネガティブなテーマを河原ならどう取り扱うかなどの質問もなされた。

5.3. 指定討論者からのコメント

佐藤浩樹氏からは、今置かれている状況のなかで新たな工夫を取り入れていく3人の前向きな姿勢に学びたい、地域と自分との関わりはコロナ禍でなくともキーワードといった点が強調された。

碓井照子氏からは、コロナ禍を通じて、経済効率至上主義から人間の満足度や自由、環境重視へ、また東京一極集中ではなく地方の時代へと、価値観を変えることの重要性が強調された。

中澤静男氏からは、子どもに自分なりの考えをもたせようというこだわりがあるのが3人の共通点であり、コロナ禍における地域学習は教育者としてのこだわり次第との指摘がなされた。

3氏に共通していたのは、教員に対して、前向きに、ポジティブに、自分なりのこだわりを持ってほしいとのメッセージが強調されたことであった。また、子どもたちが（あるいは教員も）自身との関わりを意識しながら価値観・生き方を変えることや、話し合う必然のある問いを工夫することの大切さが説かれた。以前から重要であったことが、コロナ禍で顕在化したとすることができる。

なお、実践報告者3名がシンポジウムで提示したスライド資料は、人文地理学会地理教育研究部会のウェブサイトに掲載しているので参照されたい。

6. 得られた知見の整理と生かし方

グループディスカッションの記録や、事後に参加者に記入を依頼したアンケート（回答者83名）には、コロナ禍をふまえた地域学習の在り方を示唆する知見が詰まっている。本章では、それらを整理し今後の地域学習につなげたい。

事後に参加者に記入を依頼したアンケートには、（1）

参加要件（所属学会等）、（2）ご所属の種別、（3）年齢（何十歳代か）、（4）お住まいの都道府県、（5）「あなたが小学生の頃に経験した地域学習で印象に残っている内容を、一つ具体的に挙げてください。」、（6）「本シンポジウムで、あなたが参加したセッションはどれですか。」、（7）本シンポジウムの総合満足度はいかがですか（4段階）、そして（8）「本シンポジウムについてのご意見・ご感想をご自由にお書きください。また、今後ESDや地域学習に関してどのような活動を進めるのが良いでしょうか。ご意見、アイデアをお願いいたします。」という8項目の設問を置いた。

事後アンケートの回答者の内訳は、（2）によると、大学等の教職員25名、学生・生徒22名、小学校教員12名、高等学校教員8名、中学校教員5名、NPO等の職員5名などであった。（7）の総合満足度は、1（最低）が0名、2が4名、3が28名、4（最高）が51名であった。小学校および中学校の教員は全員が4と答えており、この層にヒットする内容となったことがわかる。2と答えた4名は、所属は様々で、（8）の自由回答にそれぞれ、「歴史的な視点からの分析」「もっと遠隔授業の問題（教員側、生徒側、環境など）を知りたかった」「途中でしか参加できなかった」等と記している。1名は「初のZoomでのシンポジウムでしたが、大変有意義な時間でした。最初は5時間画面と睨めっこかなと思ったんですが、時間があつという間に過ぎました。」と記しており、なぜ満足度が2であるのかは不明である。

図5は、事後アンケートの設問（8）への回答を、図2と同様に共起ネットワーク図の形で示したものである。開催者への謝意や、発表・実践内容が参考になったといった感想が多い。また、コロナ禍における地域学習について回答者自身の授業実践や生き方に引き付けて考えた例が目立つ。グループディスカッションの進行の難しさや、コロナ禍で活用可能性の増大したオンライン環境について積極的に考えた回答もみられる。

以下では、グループディスカッションの記録と、事後アンケートの（8）に記された内容を用いて、コロナ禍の経験をふまえた今後の地域学習の在り方を検討する。内容は大きく、フィールドワークの実施に関するもの、オンライン環境に関するもの、学びの対象としてのコロナ禍に関するものの3つに分けられる。フィールドワークの実施については、実施前の地域概要把握やアポイントメントに関して多く議論がなされているため、これらを分けた計5つの内容について検討する。

6.1. フィールドワーク実施前の地域概要把握

フィールドワークは、実施する前の準備が重要である。コロナ禍においては特に様々な配慮が必要となる。

社会科で市町村に関する学習を行うことになっている小学校3年次の担任からは、「3年生で双方向（の遠隔授業）は難しい。（中略）最初は地図帳を触る。学校の

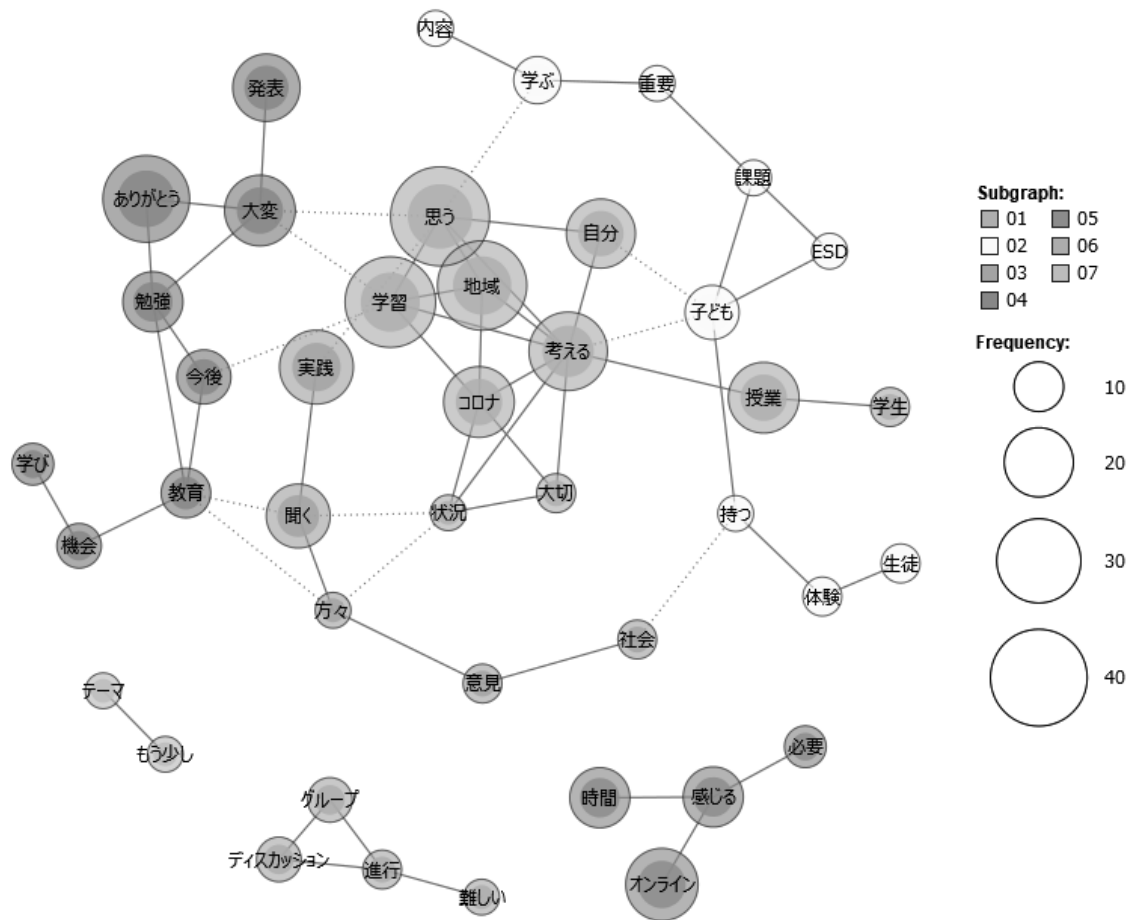


図5 事後アンケートに設けた「本シンポジウムについてのご意見・ご感想をご自由にお書きください。また、今後ESDや地域学習に関してどのような活動を進めるのが良いでしょうか。ご意見、アイデアをお願いいたします。」との問いに対する自由回答の共起ネットワーク図

KH-Coder を用いて作成。

周りをグーグルアースで見た。ロイロノートで感想を提出。」との報告があった。ウェブ上の空中写真からの気づきを事前にオンラインで得ることは可能である。

中学校での事前学習について、「フィールドワークが4月であったのを9月に変更し、そこまで課題による個人のフィールドワークをし、プレゼンをつくる。動画を利用し全員が共有し、意見を交換する。このような交流をリモートで行うことで顔でのつながりを作り、集合場所のようなやりがいのある実践がつくれている」との報告もなされた。集団ではなく個人でフィールドワークを行い、その後のオンライン交流で生徒間の横のつながりもつくろうとするものである。

このほか、どうしてもフィールドワークの実施が困難な場合は、地域に関する調べ学習を通じて、現地に行けないからこそ行ってみたいという意欲を高めるしかけを模索したいとの回答や、地図記号への興味を引き出すところから入るというアイデアも得られた。

6.2. フィールドワーク実施前のアポイントメント

コロナ禍においては、人との対面接触には気を遣わざるを得ない。この点が、地域の住民等から学ぶことも重視する地域学習では、従前以上のハードルになる。

取材先にアポイントメントを取る中で、オンラインでの対応してもらえるかを聞くというアイデアや実施経験は、何人からも聞かれた。

また、オンラインの場合も対面の場合も、先方は感染症対策を考えて身構えることが多くなる。教員が相手の方に学習の意図をきちんと伝えることは普段以上に必要である。また、子どもが取材に行く場合には、自己紹介をきちんとし、何のために話を聞かせてもらうかを説明できるようにしておくことが重要との指摘もあった。教員は「ネタになるな!」と思って物事を見てしまうが、人にアプローチするときはその対象の人を尊敬する念をもち、熱い思いをぶつけるのがよい。」との回答もあった。

6.3. フィールドワークの実施

グループディスカッションにおいては、フィールドワークを実施できていない教員や、教職をめざす大学生等から、フィールドワークを実施した教員に対する質問が多くなされた。

たとえば、小学校3年の社会科および総合的な学習の時間で、ある市と地域住民が地域の空き家を活用して市のよいところ発信していくプロジェクトに子どもたちも参加させてもらったとの報告があった。子どもたちと一緒に、その市をPRするための商品を考えてという。コロナ禍の休校期間が、地域を歩く機会の増大につながり、それが教材開発にもつながったという事例である。これについては、「コロナという状況の中で、どのような地域学習ができるかを考えるために町を歩いた。その時に空き家プロジェクトに出会った。コロナ禍という現状だからできた取組だった。また今年は学年の国語科と社会科を担当している。国語の単元の中に社会科に活用できるものがたくさんある。（教科書は）よく考えられているなと思った。横断的にやっていけるのも良かった。」とのメモが残されている。

上記ともかわるが、国語や算数の授業時間確保が優先される中、基準をクリアして地域に出る努力を重ねる必要があるとの意見もみられる。

このほか、地域を全体的に網羅するよりもどこかに集中する形で実施するものよりの考えや、地域住民の側から今年はフィールドワークの実施をどうするのかという問い合わせがあって、実施する方向で一緒に対応策を考えたとの報告もあった。地域とのつながりは重要である。発掘現場の見学や職場体験を実施したある教員は、「地域密着。地域の方が協力してくださり、つながりを大切にしている。その人に会わないとわからない部分もある。」と述べている。

6.4. オンライン環境

オンライン授業の実施については、学校間の違いが大きい。中谷氏が実践報告で強調していたような、オンライン環境を用いた学級づくり・授業づくりを丁寧に行うことが基本となる。

実施者からはポジティブな声が聞かれる。高校生や大学生については、授業の動画を配信して、省察させレポートを書く課題も出すことで、学生の分析力や書く力が格段に伸びているとの報告がなされた。地域学習に関わらず「考える教育」ができるようになったとの声もある。

「学習してまとめたものを映像化させたり、商品化させたりして、企業に見てもらおう。」という実践事例の紹介もなされた。コロナ禍を機にICTを活かした学習活動の長所を取り込み、さらに社会への発信も強めようとする意欲的な実践である。

また、オンラインを活用した地域学習について、「オンラインで人とも出会える。オンラインでしか出会えない人も

いる。」というコメントもある。オンラインでのゲスト講師による授業や交流は、時間的・空間的・金銭的制約を軽減することにつながる。オンラインで実施することで、「実際に行ってみたいという意欲の喚起もできるのではないか」との声もある。オンラインならではの人の出会いや、協働・発表の機会をつくることが可能である。

6.5. 学びの対象としてのコロナ禍

コロナ禍は、社会に大きな変容をもたらしている。それ自身が学びの対象になるとの実践報告に呼応した形の意見交流もなされた。「自分はモンゴル出身だが、今回のコロナ禍で留学生も大変な経験をしている。経済的にも苦しい。河原先生の発表聞いて、コロナをポジティブに捉えていくことの大切を実感した。」「河原先生の発表を聞いて、シンガポールやアフリカといった環境によってコロナの捉え方が異なることが驚いた。このような海外の事例を自分事として考えるにはどうしたらいいのでしょうか?」「教師が生徒だった時と異なり、海外にルーツを持つ人やその家族が増えていることから、教師が体験したことのない異文化体験を子どもたちが日常的に接している事実を前提とした学習が必要になると考えている。」といった議論がみられる。

以上の内容は、コロナ禍による社会変容をローカルな事象のみでとらえるのではなく、グローバルとローカルのつながりを意識した「グローカル」な学びにしていこうことの重要性を示している。また、人類のほぼすべてが影響を受けているコロナ禍について、地域内外の様々な立場・境遇にある人々のことを考えながら、社会の在り方を議論することが可能である。この点に関して、具体的な実践事例の報告は今回の参加者からは得られていないが、今後への可能性が開けていると言える。

7. おわりに

本稿の目的は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的・全国的拡大による学校教育への影響をふまえた、地域学習（郷土学習）の在り方を検討することであった。このテーマで実施したオンラインシンポジウムの開催経緯や内容を記録し、議論を経て得られた知見を今後に生かしたいと考えた。

得られた結果は3つに大別できる。第一に、地域をめぐるフィールドワークは、地域のリアルな状況を把握するうえで重要であり、関係者の理解を得たうえで積極的に実施する必要がある。第二に、オンライン環境の活用可能性が増していることは地域学習にとって好機になる。第三に、学びの対象としてのコロナ禍が加わった。コロナ禍の状況からは、ローカルな地域の様々な要素とグローバルな要素がリンクしていること、社会構造や政治が私たちの行く末を大きく左右することが実感でき

る。以上の3点を組み合わせることで、地域学習を通じて、学習者は持続可能な社会の構築を自分事のできる可能性がある。

今後は、感染症の常態化を前提とした地域学習が必要になると思われる。その際、「それでも地球（人）は生きている」という認識は重要である。地球理解（global understanding）の重要性はますます大きくなっており、行けない地域への想像力が求められる。これが欠如すると、差別につながる。その意味で、グローバル教育、国際理解教育、開発教育と、地域学習との接点を積極的に作っていく必要がある。

さらに、「それでも地域で生まれ育つ」ことに対する認識も重要である。自分の地域を基盤にした自然理解と社会認識がますます必要とされる。地域での実感・体感を基盤にした想像力の獲得に、地域学習の意義を見出し、今後につなげたい。

付記

本稿で取り上げたシンポジウムの実施にあたり、本文中に記しました開催団体の関係者や指定討論者には大変お世話になりました。大西浩明・中澤静男（奈良教育大学）・河野晋也（大分大学）・後藤田洋介（相愛大学）・谷垣徹（奈良教育大学・院生）の各氏とは、企画立案や運営をともに行いました。杉山拓次（奈良教育大学）氏およびいずれも小学校教員である阿彌茉央・新宮済・石田通大・春日光・蔵前拓也・高良宗彦・島俊彦・中澤哲也・西口美佐子・樋口大介・町田幸恵・圓山裕史・三木恵介・山方貴順の各氏（五十音順）には企画段階でご意見をいただき、また当日は記録等をご担当いただきました。樫原正巳氏（日本ESD学会事務局（当時））には会計をご担当いただきました。心より感謝申し上げます。なお、本稿の1章と5章以降は河本が、2章は吉田が、3章は中谷が、4章は河原がそれぞれ執筆を分担しました。

引用文献

- 麻生慶彦・金田亜妃子・松岡洋介・志村喬・三橋浩志（2020）,「ブレイクアウトセッションと全体での意見交換報告」,新地理,第68巻,2号,pp.31-34.
- 井田仁康（2020）,「『with コロナ, post コロナにおける地理教育のあり方オンライン交流会』—開催趣旨・全体概要—」,新地理,第68巻,2号,pp.3-6.
- 碓井照子（2018）,「地理総合」ではじまる地理教育—持続可能な社会づくりをめざして—,古今書院,200P.
- 佐藤浩樹（2019）,小学校社会科カリキュラムの新構想—地理を基盤とした小学校社会科カリキュラムの提案—,学文社,190P.
- 柴田祥彦（2020）,「地理教材共有化サイトの構築について」,新地理,第68巻,2号,pp.26-30.
- 田部俊充（2020）,「『with コロナ, post コロナにおける地理教育のあり方オンライン交流会（2020年5月16日）報告』刊行にあたって」,新地理,第68巻,2号,p.2.
- 中谷佳子（2020）,「オンラインホームルームの取り組み—新たな空間『Teams』での学級づくり—」,新地理,第68巻,2号,pp.21-25.
- 前田稔（2020）,「デジタル・シティズンシップ教育とWith and Post コロナ—学校教育の今浦島—」,日本教育学会大会研究発表要項,第79巻,pp.286-287.
- 三橋浩志（2020）,「文部科学省による各種通知と地理教育の関係について—情報提供—」,新地理,第68巻,2号,pp.7-12.
- 三橋浩志・志村喬（2020）,「全体総括—アンケート結果を踏まえて—」,新地理,第68巻,2号,pp.35-40.
- 森本郁代・井出里咲子・宇佐美洋・武黒麻紀子（2020）,「特集『新しい学習・教育が変えていく社会—「社会言語科学」からの貢献—」,社会言語科学,第23巻,1号,pp.1-4.